

シュピッツァーとデイドロ

——文体分析と時間性——

I

レオ・シュピッツァー(Leo Spitzer, 1887—1960)は狭義の意味での比較文学者ではない。しかし、ロマンス諸語文学の研究に始まるその研究領域の拡がりには、同様の位置にあるアウエルバッハ(Erich Auerbach, 1892—1957)などと並んで、比較文学の古典とも言うべきいくつかの著作に結実している。比較文学にとってのシュピッツァーの重要性は、彼がこれらの著作の中で実践し発展させた文学研究の方法にある。〈explanation de textes〉(本文分析)と、〈stylistique〉(文体分析)の方法がそれである。これらの方法は、比較文学の研究において、殊に、直接の接触が認められない複数のテキスト間の比較研究の可能性をひらくとい

小 宮 彰

う点で、画期的な意味をもつ。

そして、彼の著書『*Linguistics and Literary History* (『言語学と文学史』、一九六二)⁽¹⁾に収められた論文『*The Style of Diderot*』(『デイドロのスタイル』)は、彼のこの文体分析の方法がもっとも著しい成功を示した論文の一つである。シュピッツァーはの中で、デイドロ(Denis Diderot, 1713—1784)の性格を異にする三つの主要な作品からとったテキストを文体分析することによって、それらのテキストに共通な文体的特質を引き出し、そこから、著者デイドロの思考・表現に固有な身体的リズムが、デイドロの固有な時間性として一貫して働いていることを明らかにし、そしてそれが思想家デイドロの理論的著作の基本的主張と合致するものであることを示した。

他方、ディドロにも、彼自身の文体論を、言語の生成や時間性についての議論を展開して論じた著作がある。ディドロの初期の著作、*Lettre sur les sons et les muets*（『聾者と啞者についての手紙』、一七五二⁽²⁾）である。この著作の中でディドロは、彼の言語論・文体論を、基本的枠組みにおいて、ほぼ十全な形で提示している。したがって、この著作はディドロの、文体に関する自覚的な理論的把握と見てよい。シュピッツァーの論文は、ディドロの意識的および前意識的な文体の特徴に関するものだから、この二つの著作の間には、当然、何らかの照応関係が認められるはずである。

この小論の目的は、この照応関係を明らかにすることによって、一方ではシュピッツァーの文体分析の、他方ではディドロの言語論の、一層深い理解に達することである。

その前にまず、この二つの著作の直接の接点を見ておこう。シュピッツァーの論文にはディドロの多くの作品が引用されているが、この『聾者と啞者についての手紙』への直接の言及はない。しかしその論文に付された原注1（note 1）の中に、次のような文が見出され、少なくともシュピッツァーがこの著作を参照していたことがわかる。

われわれは、ディドロが詩人たちの発見（*expressions énergiques*、*le beau propos*、など）を高く呼んだように、彼の *hiéroglyphes*、

シュピッツァーとディドロ

を、それらが見出されるまさにその場所で (*hic et nunc*) 解説しなければならぬ⁽³⁾。

ここで言及されている *expressions énergiques* と *hiéroglyphes* とは、後に示すように、ともに『聾者と啞者についての手紙』の中で、ディドロが中心概念として提示している用語に他ならない。

しかし、シュピッツァーがこの著作を参照していたことは確かだとしても、そのこと自体は大きな意味をもたないだろう。なぜなら、シュピッツァーの意図は、あくまでディドロのテキストから直接、その文体的特質を引き出すことであり、ディドロの文体理論を援用することではないからである。この小論の意図も、二つの著作の間の影響関係を見出すことにはなく、シュピッツァーとディドロの両者の文体論の、より本源的な一致点を見出すことにある。

II

まず、『*The Style of Diderot*』におけるシュピッツァーの主張を見よう。シュピッツァーはそこで、「表1」に示した各テキストを分析して、その特徴を取り出して論じている。その論述は全て具体的な例証に沿って提示されているが、その結論だけを取り出せば、彼が見出したことは次の三点に要約できるだろう。

【表1】 Diderot 関係年表

1713	Denis Diderot 誕生
1747—48	〔 <i>Cours de belles lettres distribué par exercices</i> par Charles Batteux (1713—1780)〕
1749	<i>Lettre sur les aveugles</i>
1751	<i>Lettre sur les sourds et les muets</i> (本稿の主要テキスト)
1751—56	<i>Encyclopédie</i> , t. I—VII (★ l'article «Jouissance» ☆ l'article «Génie» 含む)
1760	★ <i>La religieuse</i>
1769	☆ <i>Le rêve de d'Alembert</i>
1760—72	★ <i>Le neveu de Rameau</i>
1772	☆ <i>Sur les femmes</i>
1784	Paris にて死去 (★ L. Spitzer «The Style of Diderot» における主要分析テキスト ☆ 同論文に引用されている他のテキスト)

第一に、ディドロの文体に共通する特性として、それが、文章のリズムの一定の変化パターンをもつということ。すなわち、平坦な叙述のリズムに始まり、緩やかな上昇のリズムへ、ついで急速な上昇に移り、それが一つの頂点に達した後、緩やかな下降のリズムを経て、再び平坦な調子に戻ってテキストの一つのまとまりが終る、という上昇下降のパターンをもつということである。

【表2】 Spitzer による l'article «Jouissance» における同語反復、同意語反復の分析例 (同論文 p. 141)

qui pense et sent comme vous, ⁵	
qui a les mêmes idées, qui éprouve la même chaleur	[=sent comme vous a physically] b spiritually]
les mêmes transports	
qui porte ses bras tendres et délicats vers les vôtres	[the epithets <i>tendre, délicat</i> have both a spiritual and a physical connotation]
qui vous enlace	

続、〈style coupé〉である。次の文がその例である。

…… le cœur palpite; les membres tressaillent; des images

第二に、こうしたリズムの変化は、同語または同義語の反復、文章の息の長さといった、文章の中に客観的に見られる文体的特徴によって表わされているということだ。「表2」は、シュピッツァーによる同語・同義語反復の分析例である。それらの文体的特徴のうちもっとも重要なものは、シュピッツァーがディドロの文体の特徴であると考え、クライマックスに向かう際の急激な上昇のリズム(シュピッツァーはそれを「Self-potential」)〔自己強化の運動〕と呼ぶ)の中に現われる、短い文の息せくような連

voluptueuses errent dans le cerveau; …… La vue se trouble, le délire naît; la raison, esclave de l'instinct, se borne à le servir, et la nature est satisfaite.

〔心臓は高鳴り、四肢はふるえ、欲望をそそるイメージが脳髓をかけめぐる。(中略)。視野は乱れ、妄想が生じる。理性は、本能の奴隷となって、ひたすら本能に仕える。そして自然はその願望を満たされる。〕(『百科全集』の項目「Jouissance」〔快樂の享受〕の中の一節)⁽⁴⁾

最後の行の〈servir〉までが〈style coupé〉である。そしてそれに続いて、パラグラフ全体の頂点を示す〈et〉が置かれている。シュピッツァーは、これを〈et of culmination〉(頂点のet)と呼んで、〈style coupé〉とともに、デイドロの文体に現われるもっとも著しい特徴的要素として提示している。

第三に、シュピッツァーは、以上のような文章のリズムの変化、そこに見られる文体的諸特徴は、その文章を書いている著者デイドロの内的なリズムを写していると考ええる。そして、彼が第一に分析した『百科全書』(l'Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, 1751—1772) の「Jouissance」の項目(ペリシヤイドロは性的な快樂について述べている)における記述内容と、そこに

シュピッツァーとデイドロ

見出される以上述べたようなリズムパターンが完全に一致することから、デイドロの文体を支配する彼の内的リズム、特に〈self-potential〉の運動は、性的快樂における〈意識—身体〉の運動と同型であるということ、すなわち、デイドロにおいては、性的行為が、他の全ての事象を記述する際の〈Grunderlebnis〉(基礎経験)をなしている、とシュピッツァーは主張する。

シュピッツァーによる以上の立論はきわめて大胆なものであって、それ自体議論の対象になりうる。けれどもこの立論の可否それ自体は本稿の主題ではない。本稿の関心は、それが、デイドロにおける〈言語〉と〈時間〉の関係という、より本源的な問題に光を投げかける点にある。私自身、デイドロのテキストに表われる、〈時〉あるいは〈時間〉についての把握と表現の特異性という問題にずっと関心を持ち続けてきた。この観点から見ると、シュピッツァーがこの論文で示していることは、デイドロに固有な〈時間性〉の存在の指摘と、それが、性的行為を範とする〈デイドロの身体〉の時間性〈に他ならない、ということである。本稿の意図は、〈言語〉と〈時間〉との本源的関係という基底的主题を視野に置いて、このシュピッツァーの主張をもう一度、デイドロ自身の理論の枠組みに投げ返してみることである。

III

ここでディドロの *Lettre sur les sourds et les muets* (『聾者と啞者についての手紙』)に移ろう。この変った題名の著作は、よく知られてゐる *Lettre sur les aveugles* (『盲人についての手紙』、一七四九)に引き続いて書かれ、『盲人についての手紙』が人間の認識を主題としているように、△聾者▽△啞者▽ということ△言語▽を主題とした作品である。久しく注目されなかったこの著作が関心を集めるようになったのは、言語論がさかんになった六十年代後半以降のことである⁽⁵⁾。

この作品の構成は、当時の古典文法および修辞学者であるバトゥー (Charles Batteux, 1713—1780) の著書 *Cours des Belles lettres distribué par exercices* (『例解美学講義』、一七四八—一七四九)についてその著者にあてた手紙という形式をとっている。

ディドロの議論は、バトゥーがその著書の中で述べている△倒置▽ (inversion) の問題に向けられている。バトゥーは、ラテン語とフランス語において、名詞とそれを修飾する形容詞の語順が逆であることに注目して、一体どちらが、人間の思考にとって△自然な順序▽ (l'ordre naturel) であるかという問題を立てた。バトゥーの議論は古典文法学者としての立論だったが、ディドロはこの問題をとらえて、より本源的な言語論を展開している。

ディドロのこの問題に対する見解は、まとめれば次のようなものである。すなわち、本当の意味で△倒置▽ (inversion) などというものはない。たとえ文法的に規範から外れる表現 (ディドロはこのように△inversion▽という概念を拡張する) であっても、それは事実をより忠実に表現しているという意味で、その場合には△自然な語順▽であると言える、ということだ。

このことを、ディドロが挙げている次のようなキケロの文について見てみよう。

《Diturni silentii, patres conscripi, quo eram his temporibus usus non timore aliquo, sed partim dolore, partim verecundia, finem hodiernus dies attulit...》 (リナン語原文⁽⁶⁾)

《Du long silence, membres du Sénat, que j'ai gardé récemment, non pas par crainte, mais en partie par douleur, en partie par un sentiment des convenances, le jour présent a amené la fin.》 (リナン語訳⁽⁷⁾)

「長い間の沈黙の、元老院の諸兄、私がこの日頃、怖れからでなく、一つには苦しみから、また一つには礼節から、守ってきたこの長い沈黙の終りを今日の日に迎えた。」

これは、キケロが故人マルケルスに献げた追悼の辞 *Pro Marcello* (『マルケルスに献ぐ』) のはじめの部分である。問題は、この文頭の〈diuturni silentii〉(長い沈黙の) が属格であって、二行下の〈finem〉(終りを) にかかる点にある。確かに語順についての規制が比較的緩やかなラテン語においても、これはやや無理な言い分であって、語順をこの通りにするのなら、対格の〈diuturnum silentium〉(長い沈黙を) として、それを「終る」という言い分の方が文法的には普通だろう。けれどもデイドロは、こうした考え方に対して、次のように反論する。

キケロがこのマルケルスへの追悼の辞を、まさしく〈Diuturni silentii, Patres Conscripti, quo eram his temporibus usus, etc.〉と始める時、人は、彼〔キケロ〕の長い沈黙に先立って、その沈黙の後に続くはずの、したがってその沈黙の終りの時を決定する一つの想念がすでに存在していたこと、そしてその想念こそがキケロをして、〈diuturnum silentium〉ではなく〈diuturni silentii〉と言わしめたことを理解する。⁽⁸⁾

すなわちデイドロは、どれだけの間、故人のために沈黙を続け、それをいつ破るかという考えは、沈黙に入るに先立ってキケロの中にすでに

シュピッツァーとデイドロ

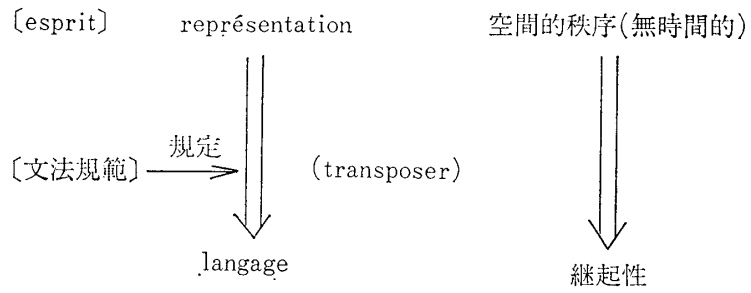
にあった、と考える。沈黙とその終りとは、一つの考えに支配されて密接に結合している。属格の「長い沈黙の」はこの結合の強さを表わしており、〈diuturni silentii〉と〈finem〉が離れていればいるだけ、それを結びつける想念(死者への思い)の長く強い持続は明確に表現される、ということである。そして、この想念がキケロにとって先にある以上、〈diuturni silentii〉という始まり方は、キケロの内部においては全く自然な語順(ordre naturel)なのだ⁽⁹⁾とデイドロは主張する。以上の例からデイドロは次のような結論を導いた。

それゆえ、私が、観念と記号との自然な順序(ordre naturel)と人学的ないし制度的順序(ordre scientifique et d'institution)とを区別したことは正当なことであつた。⁽⁶⁾

このデイドロの立論は、ポール・ロワイヤル文法学派に代表される当時の支配的な言語論に向けられている。十八世紀フランスにおいて一般的だった人言語について⁽¹⁰⁾の考え方を、M・フーコーの整理に従って概述すれば次のようになるだろう。

まず第一に、言語によって表わされるものを、心の目(l'esprit)に映った人表象(representation)である⁽¹¹⁾と考える。人表象の中で、人表象は明確にかつ空間的に秩序づけられていて、ある瞬間にお

〔図1〕 ポール・ロワイヤル一般文法学派の言語形成モデル



(l'ordre naturel = l'ordre d'institution)

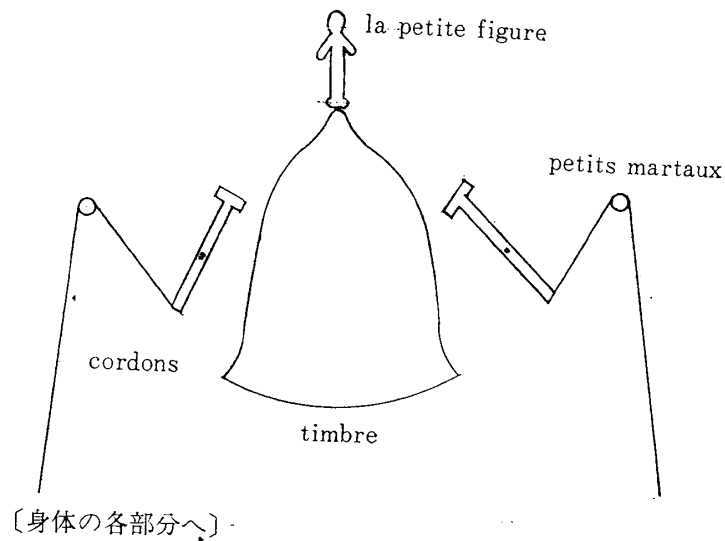
いって同時に全体が表象されているものとして、すなわち、詳細に描かれた絵画のようなものとして考えられている。この「表象」を言語に置きかえることが言語表現であって、言葉は一度に一つの観念しか表わせないから、その置きかえは必然的に線的な継起によって配列される。そして、一方で「表象」にそれ自体、空間的秩序があり、他方で「言語」に文法的規範が存在することから、一つの表象は、いわばまゆから糸が紡ぎとられるように、一定の配列をもった文に一意的に置きかえられるということになる。したがってこの考

え方のもとでは 「l'ordre naturel」と「l'ordre d'institution」は必然的に一致していると考ええる。(「図1」参照)。

デイドロは以上のような考え方に反対して、両者が一致しないことがありうることを主張したから、そこには、以上述べたものとは異なる「言語」生成のモデルが考えられていなければならぬ。デイドロはそ

シュピッツァーとデイドロ

〔図2〕 <horloge ambulante> 模式図



れを、『聾者と啞者についての手紙』の中で、次のような比喻によって表わしている。

デイドロは人間を一つの「horloge ambulante」(歩きまわる時計)にたとえる。心臓は時計のゼンマイに、他の臓器は他の部品に対応する。そして彼は、人間の知覚能力(perception)を「図2」のようにモ

デル化する。まず、頭の中に一つの鐘 (*un timbre*) と、それをたたく小さなハンマー (*de petits marteaux*) が一定数ある。そしてそれぞれのハンマーには無数の糸 (*cordons*) がつながれていて、その先端は、身体全ての表面および感覚器官に達している。このモデルでは、個々の感覚はこれらの糸を引っ張ることによって、中枢の鐘をそれぞれ異ったように打ち鳴らすことになる。そしてその鐘の上には、この鐘の音が調和して鳴っているかどうかを聞き分ける小さな人形 (*la petite figure*) が置かれている。

このモデルにおいて、複数の糸を同時に引くとうなるだろうか。デイドロは引き続いて次のように言う。

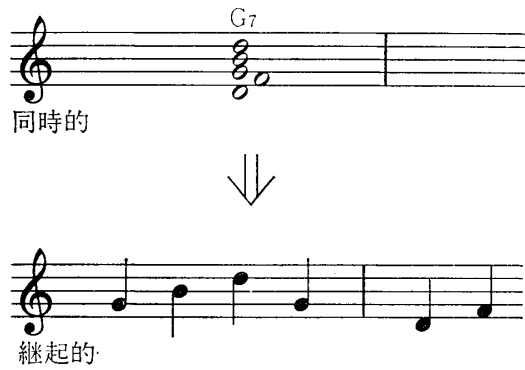
これらの小さな糸のいくつかが同時に引かれるなら、鐘は多くのハンマーによって同時に打たれ、小さな人形はいくつかの音を同時に聞くであろう。これらの糸のうちには、常に引かれているものがあると考えよう。ちょうど、夜の静寂によってはじめて確認される昼のパリの作り出す騒音のように、われわれの中には、その連続性によってしばしばわれわれの注意を免れているいくつかの感覚が存在するだろう。われわれ自身の存在 (*notre existence*) の感覚はそのようなものである。⁽¹¹⁾

ここでデイドロは、人間の知覚を音楽の和音にたとえている。すなわち、個々の感覚は単一の音に対応し、人はその絶対音程を聞き分けられるとは限らない。デイドロによれば、知覚 (*perception*) は、基準になっているある音とその音との間の音程を聞きわけることによってなされる。そしてこの場合には、二つの音の形成する和音が調和しているかどうかさえ聞きわけることができればよい。

このモデルによれば、 \wedge 言語 \vee の生成は次のように説明される。デイドロにおいても、表現されるべき内容は継起的順序をもたない同時的なものである。けれども、それがポール・ロワイヤル学派におけるように \wedge 絵画 \vee と考えられないで、 \wedge 和音 \vee と考えられていることの意味は小さくない。音はそれ自体の持続の中に \wedge 時間 \vee をもっているからである。しかし、この \wedge 和音 \vee としての知覚のもつ \wedge 時間性 \vee は、言語の継起性と同じものではない。このモデルでは言語の継起性は、和音をそれ自体としては同時に表現できないために、それを分解して配列した時のメロディーの中の音の配列に対応する (\wedge 図3参照)。そしてこの配列を規定する規則が文法である。

以上の考え方を敷衍すれば、先に挙げたキケロの例は次のように説明することが可能だろう。すなわち、キケロの文は、彼の意図する \wedge 和音 \vee を彼の内部にあった時間性のあり方のままに響かせるために、メロディーへの和音分解の規則を若干破って跳躍の大きいメロディーにした

〔図3〕和音の音列展開



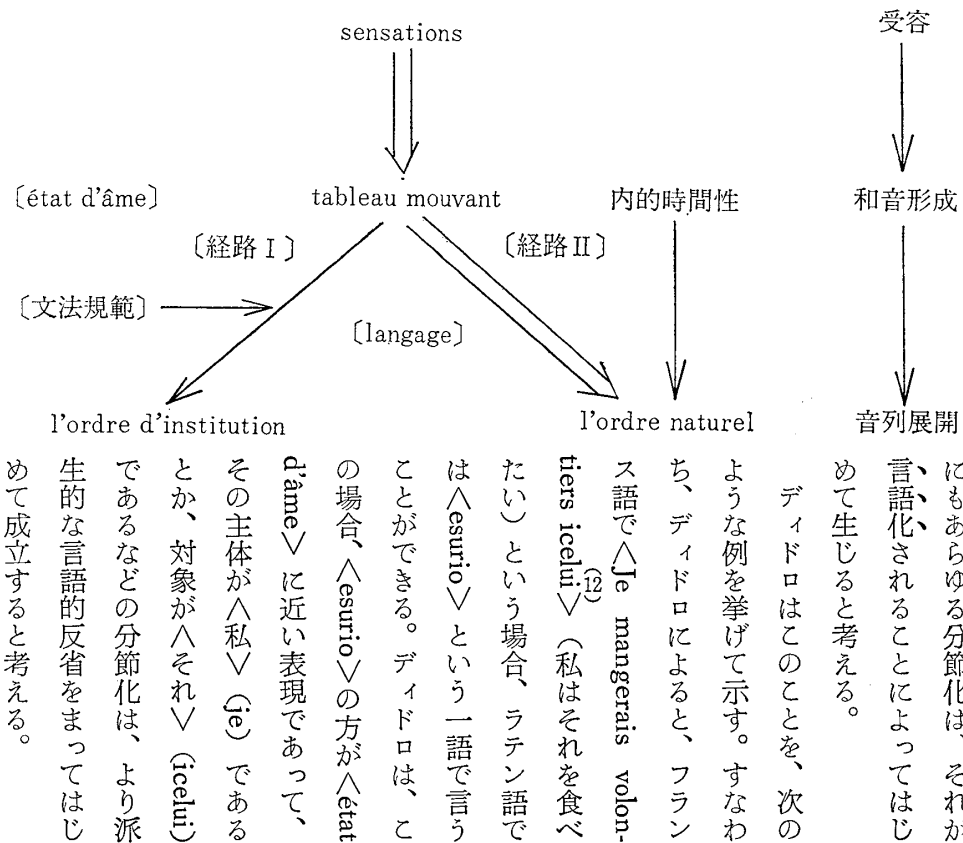
例だと。

十八世紀フランスの一般的言語モデルとディドロのモデルの相違は、一般のモデルが言語の継起性しか含まないのに対して、ディドロの場合には、言語がそれ自体としてもつこの継起性の他に、和音の響きの連続自体がもつ時間性、ベルクソンの〈純粹持続〉に対応するような

〈本源的時間性〉が内包されているということだ。この持続に対比して言えば、言語の継起性自体は、いわば時間の中での空間的配列にすぎない。

したがってディドロにおいては、言語の生成は〔図4〕に示したように、二つの経路をもつ過程として考えられることになる。ディドロの場合も、〈言語—知覚〉主体の内部では同時的な統一が考えられており、それを彼は〈tableau mouvant〉（動く絵）と呼んでいる。けれども、それと〔図1〕の〈representation〉とが異なる点は、それが時間的に同時であるのと同様、空間的にも分節化されていない〈état d'âme〉（魂の状態）と考えられていることである。彼は、空間的にも時間的

〔図4〕Diderotの言語生成モデル



すなわち、言語化された表現はもとの〈tableau mouvant〉に較べれば、みな分節化され、〈時間—空間〉化されたものである。けれどもデ

イドロは、そこに相異なる二つの言語化の経路を考える。「図4」において、「経路1」は、ただ文法的規範に従ってなされる言語化の過程を示しており、そこに成立する「l'ordre d'institution」(制度的語順)は継起性のみをもつ。これに対して「経路II」では、「état d'âme」自体がもっている本源的時間性がそのまま言語化されて、「l'ordre d'institution」とは異なる表現、「l'ordre naturel」を生み出す。

ディドロは「inversion」の問題を、この両者が相異なる場合としてとらえ、そこではむしろ「l'ordre naturel」の方が、表現主体の「état d'âme」をよりよく表わしている表現であると考え。彼はさらに、そうした表現が不可分で動かし難いまとまりをなす場合、例えば先に見たキケロの「Diuturni silentii...」のような場合を特に強調して、「hiéroglyphe」(象形文字)または「expression énergique」(力強い表現)と呼ぶ。そしてこの「hiéroglyphe」こそが、文学的表現の本質であると主張するのである。⁽¹³⁾

IV

ディドロの『聾者と啞者についての手紙』の論旨はおおよそ以上のようなものであるが、それとシュピッツァーの主張・方法との関係はどのよう⁽¹⁴⁾に考えられるだろうか。

両者の文体論における主張には、基本的な一致点が見られる。まず、

シュピッツァーとディドロ

立論の出発点において両者は一致している。

シュピッツァーがこの論文を著した最初の意図は、文学史家ランソン(Gustave Lanson) や、今日のディドロ研究者を代表する一人であるディークマン(Herbert Dieckmann) 等によってさえ、一致して、ディドロの文体の「騒々しい無秩序さ」「大げさな誇張」「不適切な表現」、すなわちその破格性が指摘されているのに対して、ディドロの文体の「適切さ」(adequacy) を示すことであつた。⁽¹⁴⁾

一方、ディドロの著作も、先に述べたような当時の一般的な規範的言語観の上に立って、例えば、ラシーヌの章句すら「le goût」(文学的趣味)を欠くとして攻撃を加えるに至るベルニ(Francois Joachim de Pierre de Bernis, 1715-1794) のような見解に対して、真の表現の力強さは、むしろそうした破格な文体にこそあると主張したものであつた。⁽¹⁵⁾

こうした基本的意図の一致から、当然、両者の、文体分析についての考え方についても一致が見られる。次に示す、ボアローの作品「Lutrin」の一節に対するディドロの分析はその一例である。テキストとそれに対するディドロの記述の後半を訳出して示す。

Soupire, étend les bras, ferme l'oeil et s'endort.

(「彼女は」ため息をつき、両腕をひろげ、目を閉じ、そして眠りに

入った。⁽¹⁶⁾

……この伸ばされた両腕がはじめの半行句とともに実に優美に再びおろされるので、ほとんど、だれもそのことに気づかれず、まして〈ferme l'oeil〉における眼ぶたの微妙な動きや、そして後半の半行句〈ferme l'oeil et s'endort〉の結末における覚醒から眠りへの知覚しえない移行にも、だれも気づかないほどである。⁽¹⁷⁾

ここに見られる、語の配列の間に、それが描き出している微妙な移行を読みとる時間性の感覚は、例えば第二節で示した、〈style coupe〉を分析する際のシュピッツァーの、事態の進行と著者ディドロの息づかいとを二重写しにして語間に読みとる分析におけるそれと、ほとんど同質のものと言えないだろうか。もちろん、シュピッツァーの場合の方が客観的な文体的特徴をより正確にとらえようとしているという相違はあるが、ここで挙げた点に関する限り、ディドロの文体論を、シュピッツァーの〈文体分析〉に先行するものととらえてよいのではないだろうか。

さて、以上の諸点を見た後で、再びシュピッツァーの論点を見てみると、次のような疑問がおこる。すなわち、シュピッツァーがディドロの〈身体〉に固有な時間性と考えた、〈self-potential〉や〈style coupe〉のリズムが、どこまで個人としてのディドロに固有のものである

のか、という疑問である。

ディドロが『聾者と啞者についての手紙』で述べた言語生成モデルは、彼を含めて全ての言語主体に適用されうる一般理論である。そこでは、およそ真に文学的な力をもつ表現ならば必ず実現しなければならぬ〈本源的時間性〉の存在が示されていた。そうした本源的な時間性はディドロがもつとも表現しなかったところのものである。そうだとすると、シュピッツァーがディドロの〈身体〉に固有の時間性と考えた、ディドロの文体のリズム的特質は、ディドロにおけるような言語モデルにおいて、表現としての表現（「図4」の「経路Ⅱ」）が一般的にもつ時間性であるとは考えられないだろうか。

シュピッツァーもこうした点について述べていないわけではない。彼の論文の終り近く、『ラモーの甥』（*Le Neveu de Rameau*, 1760—1772）の文体分析から、ディドロの文体の本質的特質として〈表現性の自動運動〉（*autonomy of expressivity*）を指摘し、結論へと移って行く箇所、次のように言う。

ディドロ自身のパロディであるところの、この甥によるパロディの演技において、ディドロは、表現性の自動運動（*the autonomy of expressivity*）を、それ自身を除いていかなる神をもたないディオニソスの錯乱を、明示している。⁽⁸¹⁾

シュピッツァーはここでは、『ラモーの甥』という一つ作品について△表現性の自動運動▽ということを行っているが、この指摘は同様にデイドロの他のテキストについてを言われている。すなわち、シュピッツァーは、彼が見出したデイドロに特徴的な文体は、実は△表現性の自動運動▽という一般的現象を表わしている、と考えているということだ。

この△表現性の自動運動▽という言葉の背後には、「神なき言葉の暴走」というシュピッツァーの価値判断が含まれている。しかしこうした価値判断を除いて見れば、シュピッツァーとデイドロとは、△表現性▽という一点で一致した考え方をもっていると言えるだろう。すなわち、シュピッツァーがデイドロの文体に見出したものは、およそ△表現としての表現▽がもたざるをえない必然的な構造であり、他方、それを理論的に論じた著作が、デイドロの『聾者と啞者についての手紙』であったということである。

われわれはこの点を、両者の間のもっとも基底的一致点としてとらえてよいだろう。この基底的一致の上に立って、二つの重要な帰結が導かれる。第一には、およそデイドロの思想とテキストとを理解する場合に、シュピッツァーが見出したデイドロの文体的特質への理解が、その基本的前提の一つとされねばならないということ。そして第二には、シュピッツァーの文体論とデイドロのそれとがその基底において一致す

シュピッツァーとデイドロ

ることから、デイドロの言語理論の諸要素が、自らの方法を明示的に理論化しないシュピッツァーの△文体分析▽の方法を理解し摂取する上で、重要な示唆的意味をもつ可能性がある、ということである。ここからさらに、より具体的な主題として、シュピッツァーが見出した△身体の時間性▽特に△性▽の問題と、デイドロが論じた△言語▽と△時間▽との多元的關係との間の関係が問われるのだが、この点についての考察は別の機会にゆずりたいと思う。

注

- (1) Leo Spitzer, *Linguistics and Literary History*, Russell & Russell Inc., New York, 1962. 《The Style of Diderot》 巻の pp. 135—191 に収められている。

- (2) 本稿において、デイドロのテキストは原則として次の版本による。

——Denis Diderot, *Lettre sur les sourds et les muets*, texte établi et présenté par Jacques Chouillet, in Denis Diderot, *Œuvres Complètes*, dirigé par Herbert Dieckmann, Jacques Proust, Jean Vorloot, HERMANN, Paris, 1978, tome IV, Idée I, pp. 109—233. 以下 O. C. と略記。

- (3) L. Spitzer, *op. cit.*, p. 172.

- (4) *ibid.*, p. 138.

- (5) Jacques Derrida, *De la grammatologie*, Les Editions de Minuit, 1967. なお、テキスト校訂・注釈の作業では、次のものがシャイエの仕事に先行している。

Denis Diderot, *Lettre sur les sourds et les muets*, édition commentée

et présentée par Paul Hugo Meyer, *Diderot Studies VII*, edited by Otis Fellows, Librairie Droz, Genève, 1965.

- (9) Diderot, O. C., p. 154.
- (7) このトランスクリプションは、編纂の P. Meyer の注から採った。P. Meyer, *op. cit.*, p. 144.
- (8) Diderot, O. C., p. 154.
- (6) *ibid.*, p. 155.
- (10) Michel Foucault, *Les mots et les choses*, Editions Gallimard, 1966, pp. 95—107. 邦訳『ディドロ・フーコー』『言葉と物』渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、一九七四年、一〇六—一二二頁、参照。
- (11) Diderot, O. C., p. 159.
- (12) *ibid.*, p. 158.
- (13) *ibid.*, p. 170.
- (14) L. Spitzer, *op. cit.*, pp. 136—137.
- (15) Diderot, O. C., pp. 178—179.
- (16) Boileau, *Le Lutrin*, chant II, v. 164. Diderot, O. C., p. 169. 同用。
- (17) Diderot, O. C., p. 170.
- (18) L. Spitzer, *op. cit.*, p. 167.

〔本学文理学部専任講師（哲学） 一九八一年度個人研究員〕